

大項目	2	持続可能な社会の実現に向けた地球的課題と国際協力			
中項目	2-1	生活文化の多様性と国際理解			
小項目	2-1-1	文化・人種・民族と現代社会			
細項目 (発問)	2-1-1-3	人種と民族の概念を混同することの問題点は何でしょうか			
作成者名	杉本良男	作成・修正年	2017/2021/2023/2024	Ver.	1.3
キーワード	人種、民族、分類、ヘイトスピーチ				

### 発問の意図と説明

#### 1. 人種と民族について現代的意義を理解しよう。

人種と民族は学術的には明確に区別されていますが、現実には混同されることも多く、またそれによって起こる問題もまた深刻です。一般に、「人種」は身体的な変差をもとにした生物的特徴による分類ですが、「民族」は言語や習慣などの文化的特徴を共有しているという認識を持つ人びとの集団を意味します。つまり、人種は人間の外見による分類ですが、民族には当事者の主観、意識がともなっています。世界のグローバル化が進めば、国家や民族はその存在感を薄めていくものと考えられましたが、じっさいにはむしろその影響力を強めています。イギリスのEU離脱の一つのきっかけにもなった移民の問題は、かつて植民地を運営していたヨーロッパや、移民の国と言われるアメリカの国家の存亡を根底から揺るがせています。一方、人種の分類はかつてのナチスの蛮行などを考えて、学問的にはその悪影響を警戒して、意図的に使うことを避ける傾向にあります。しかしながら、実際には人種概念が堂々と使われている例があり、とくにアメリカの人口統計では、人種と民族がともに混在しています。なかでもスペイン語話者のヒスパニックには白人も含まれますが、白人からは外されています。この項では、人種と民族の概念をめぐる認識の変遷をたどりながら、その現代的意義を問うことにします。(図1)

参照 URL 1

#### 2. 人種の分類はどのようにして行われるようになりましたか

ヒト(人類、*Homo sapiens*)は、約20万年前に東アフリカに出現した霊長類の一種であり、その後、5~6万年前にアフリカを出て世界に広がり、各地の多様な環境に適応していきました。生物としては単一の種であるヒトは、環境への適応によって地域による多様性を持つようになりました。このような人類の持つ多様性は、15世紀末からの大航海時代によってヨーロッパ世界からの具体的な認識となりました。それまではあくまでも想像、空想の世界でしかなかった未知の大陸についての具体的な情報は、人類の種としての単一性と多様性をともに認識させることとなります。

ヨーロッパ世界では、奴隷交易の是非をめぐる、現地の人びとが自分たちと同じ起源を持つ人間なのかどうかという議論が起こりました。そして、聖書にしたがう全てのヒトが単一の起源を持つとする人類単一起源説と、ヒトには複数の起源を持つ異なった種類の人びとがあるとすると人類複数起源説が激しく議論をたたかわせました。前者にたてば奴隷制は否定されるべきですが、後者にたてばもともと起源が異なるから奴隷化するのは正当化されたわけです。さらに複数起源説の延長で、人類を外観から分類する「人種」の概念も導入されました。

18世紀末にドイツの自然人類学者ブルーメンバッハは、皮膚の色や頭骨の形状などに基づいて人類を5つの人種に分類しました。この五大分類は、白色のコーカソイドが純粋型で、他の4人種はそれが退化したものだとして、明らかなヨーロッパ中心主義に陥っていました。しかし、その考え方は現在もオリンピックの五つの輪などにうけつがれ、ひろく知られています。さらに、キュヴィエはネグロイド、コーカソイド、モンゴロイドの3分類を提唱しましたが、ここでもコーカソイドが世界の文明を支えてきたというヨーロッパ・白人至上主義を基本にしていました。またこれは聖書のノアの3人の息子がそれぞれの祖先にあたると考えられて広く受け入れられたのです。

19世紀末にはダーウィンの進化論やその従兄弟のゴルトンによる優生学などにもとづいて、人も人為選択によって社会が進化すると考えました。こうした優生学や社会進化論、それに人種分類などを利用して、障害者やユダヤ人を大量に虐殺したナチスの蛮行は、偏った人種分類がもたらした忌むべき歴史です。人を生物的特徴によって分類する人種概念は、人種間の違いを遺伝的な違いとして絶対化することから、根拠のない差別意識にむすびつきやすいからです。

## 図と表のページ

**Within Newsroom**

- About
- Facts for Features
- Fighting Census Rumors
- News Releases
- Press Kits
- Stats for Stories
- Tip Sheets

**For Immediate Release: Tuesday, December 15, 2020**

## アメリカ合衆国国勢調査局、2020年人口動態分析を発表 人口推定

December 15, 2020  
Press Release Number CB20-CN.133 Japanese / 日本語

Share



Subscribe



### 合衆国の人口規模を推定する数字 2020年国勢調査とは別の調査

2020年12月15日：アメリカ合衆国国勢調査局は、2020年4月1日現在の合衆国の人口推定（少、中、多）をまとめた「2020年人口動態分析」を発表しました。人口動態分析では、2020年国勢調査のように世帯から回答を回収するのではなく、現在および過去のバイタル統計のデータなどを用いて、米国の人口規模を推定します。人口動態分析は、2020年国勢調査の最初の結果が発表される前にこれらの推定を発表し、公式の国勢調査数と比較するための別の人口の指標を提供します。

人口動態分析は、2020年4月1日における米国の人口規模について、人口に関する様々な仮定に基づく3つの異なる推定を行っています：

2020年4月1日現在の米国の人口の推定の2020年人口動態分析		
少	中	多
330,730,000	332,601,000	335,514,000

国勢調査局の副局長兼最高執行責任者であるロン・ジャーミン博士は、「国勢調査局は、業務の費を確保するために多大な努力を行っています」と述べました。「人口動態分析は、2020年国勢調査人口推定の完全性分析に役立つ貴重な資料です。」

人口動態分析の推定は、現在および過去の出生・死亡記録や、国際間移動に関するデータ、メディケア記録を使って作成されます。この範囲は、推定の作成に使用された入力データおよび方法の不確実性を説明しています。

**Income, Poverty and Health Insurance**  
Now Available

**Contact**

広報室  
301-763-3030  
pio@census.gov

**Related Information**

[Press kit](#)

図1 米国の国勢調査

<https://www.census.gov/newsroom/press-releases/2020/2020-demographic-analysis-estimates/2020-demographic-analysis-estimates-japanese.html> (2023年1月参照)

### 3. 日本における人種と民族の分類はどのようにして始まったのでしょうか

日本では、明治20年代にブルーメンバッハの五大人種分類が民族に先立って紹介されましたが、「人種」の概念は当初あいまいで、漠然と特定の人間の集団を示す用語として用いられていました。一方、遅れて普及した「民族」という概念は、当初から歴史的、文化的な意味を持っており、大正時代には人種と民族は区別して用いられていました。昭和に入ると、遺伝的な特徴を持つ人種の概念がさらに明確になりましたが、第二次大戦前のナショナリズムの高揚とともに、「日本民族は長い年月の間に統合が進んで、日本人種が形成された」として、むしろ人種と民族との密接な関係が強調されるようになりました。そのため、日本人は日本民族であり同時に日本人種であるという考え方が一般に広まる結果になりました。こうした考え方は、現在でも漠然と共有されており、そのため日本は単一民族国家である、などと言って批判される指導的な人びとがあとをたちません。

日本語の「民族」ということばは非常に複雑な内容、背景を持っています。民族という言葉は漢語ではありませんが、今一般に使われているような意味は持っていませんでした。明治に入ってさまざまな外国語が翻訳されるなかで、まずは英語のネーション (nation) の翻訳語にあてられました。当初ネーションには種族、人民などの訳もありましたが、現在では、民族、国民、さらには (国民) 国家の意味としてつかわれています。また、ネーションにあたる西欧語はこれも時代、地域により複雑な変遷をとげていましたが、18世紀末のフランス革命以後は国家を構成する主体となる人びとを意味するようになりました。

このような政治的な意味でのネーションに対して、民族には、言語、習慣を共有する集団という意味での「エトノス」、「エスニック・グループ」をあてる考え方があります。つまり、政治的な意味の強いネーションの翻訳語として出発した民族は、その後文化的な意味をもつエスニック集団を意味するようにもなりました。エスニック・グループにあたる民族は、文化人類学が伝統的に研究対象としてきた少数民族に適用されることから始まりましたが、その後国家の主流をなす民族も、同様に扱われるようになります。このように、ネーションと、エトノス、エスニック・グループの意味での「民族」概念が曖昧さを含みながら併存しているのが現状です。

### 4. 中国の「民族」概念は日本から逆輸入されたのですか

日本語の「民族」という言葉は、和製漢語として中国に逆輸入されて定着していきます。清朝末期の1895年に、清国の雑誌に日本の新聞の社説、論説を紹介していた古城貞吉という日本人が「民族」という言葉を使ったのがはじまりだといわれています。その後、日本に留学したことのある梁啓超や孫文などによって指導的な原理として定着していきました。20世紀初頭にはさかんに民族主義論が闘わされましたが、そうした主張はほとんど日本で書かれたものでした。日本から逆輸入された「民族」概念および民族主義は、一国家一民族のニュアンスを持っていて、漢族が満洲族による清朝支配を打倒するための正当性の根拠になりました。しかし、中国はもともと多民族社会であり、多民族性は天子による支配正統性の根拠でした。和製漢語である「民族」が導入されたことにより、少数民族の独立志向をうながす結果になり、その後の国家統一にとっての禍根を残したのです。現在の中国では、[図2](#)に示したように漢民族と55の少数民族が認識されています。北京オリンピックの際にも少数民族を含む国民統合が高らかにうたわれましたが、その背景にはこのような複雑な事情があったのです。

### 5. 現代の人種差別はどのような弊害をもたらしているのでしょうか

グローバル化が進むにしたがって、ヒトの移動は世界各地で新たなかたちの人種差別主義の台頭をもたらしています。かつては生物的特徴による人種差別主義でしたが、現代では文化的特徴による人種差別主義、あるいは民族差別主義へと移行しています。日本は1995年に「人種差別撤廃条約」を批准しましたが、差別禁止法を制定するには至っておらず、特定民族集団を標的としたいわゆる「ヘイト・スピーチ」が野放しにされていました。2013年に京都地裁が、ヘイト・スピーチは人種差別に該当し、違法であるとの決定をいただきましたが、これはまさに画期的な決定でした。2006年に国連人権委員会に提出された報告書では、被差別部落、アイヌ、沖縄の人びと、在日コリアン、ニューカマー移民などに対する差別や偏見が指摘されています。イギリスでも、2016年にEUを離脱する方針(ブレグジット)が決定されましたが、その背後には少数者に対する根強い差別感情があるとされました。ヒトは差別する動物だといわれますが、差別はつねに自分よりも弱い人びとに対する暴力的な感情や行動をとともないます。したがって、差別をしないことを前提にした共生論ではなく、むしろ差別を前提とした共生論をつくりだす智慧が必要になっています。

## 図と表のページ

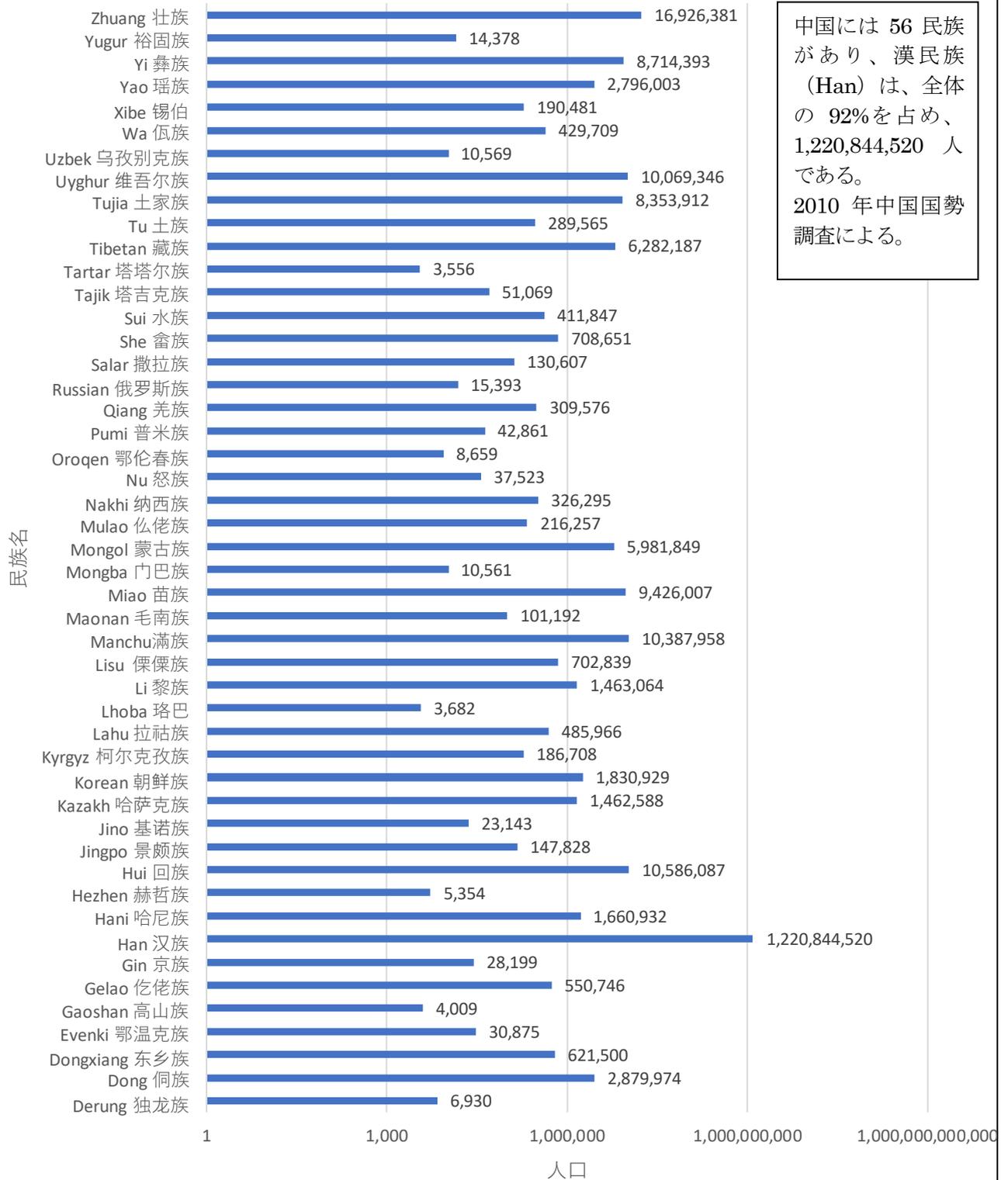


図2、中国の民族別人口（民族名は中国語）データは、[https://guides.lib.unc.edu/china\\_ethnic/statistics](https://guides.lib.unc.edu/china_ethnic/statistics)の民族別人口表を参考にグラフ化（2010年中国国勢調査資料）横軸の人口は対数目盛

## 6. 人間社会の根幹をなす「人種と民族」の問題についての常識をあらためて考え直してみよう

アメリカで2013年に始まった反人種差別運動「#ブラックライブズマター」は、2020年に入って世界的に盛り上がりを見せました。運動が始まったアメリカでは、いまだに人種差別感情が強いのも事実です。この運動が世界に広がるなかで、植民地支配や差別に加担した指導者、政治家などが攻撃の対象とされました。反差別運動のシンボルともいえる、インドの独立運動指導者マハートマ・ガンディーも、南アフリカで弁護士活動をしていたときに、黒人系の人びとに差別的な言動をしていたとされ、アフリカだけでなくアメリカやイギリスに建てられた銅像が穢されたり、撤去を求める動きも起こりました。一方、ガンディーに相對した大英帝国のウィンストン・チャーチルもまたインド人やアフリカ人への差別を問われて批判されています。皮肉なことに二人の銅像はイギリス国会議事堂前広場の少し離れたところに建てられています。

人類学者レヴィ・ストロースは、人間は分類する動物であると述べました。文化の基本は、連続している自然状態を人間の知性によって分類することで、いくつかのカテゴリー（範疇）に分けたうえで関わっていく行動におかれます。もともと切れ目のない人間個体の集合も、親と子、教員と生徒、同じ組の子、別の組の子、などと分類され、個人と個人との関係もそのようなカテゴリー分けに左右されます。いったん分類されてしまうと、それ以前の状態には戻れなくなります。つまり、分類を根本とする文化は、世界との関わりを容易にする面と人びとの認識を束縛する面との両面性を持っています。

人種の分類について言えば、ヒトの多様性はどこかで明確な線を引けるほどはっきりとした違いを持っているわけではありません。その意味では、ヒトの特質である分類という行為は、単なる区別を超えて誰が誰を分類するのかという力関係を背景にした差別に結びつく危険をつねにはらんでいます。人種概念はこのような分類好きのヒトの性向に、ヨーロッパ世界で発達した科学的思考が結びついて、あたかもそれが明確な基準に基づいた絶対的な分類だと誤認される原因にもなりました。もちろん人種も民族も当初はある便宜のためにうまれたのですが、現在では束縛性の方が際立っています。

現代世界では、グローバル化の進展によって人びとの活動の範囲は大きく広がっていますが、その反面ではむしろ内向きのローカリズムやナショナリズムが強化されるという現象を招いています。そのような状況のなかで、移民の増大などによって他者に対する寛容性が根本的に損なわれてきています。他者への憎しみは強い言葉で発せられるので、これに抗うのには大きな困難が伴います。ただ、そこであきらめていては自体はますます悪化し、発言もさらに難しくなっていきます。世界や国内の情勢をよく見極めて、冷静な判断を下すためにも、とりわけ人間社会の根幹をなす「人種と民族」の問題について、一見常識とされていることもあらためて考え直してみる必要があります。

### 参照 URL (2024年3月参照確認)

参照 URL 1 アメリカ合衆国国勢調査

<https://www.census.gov/newsroom/press-releases/2020/2020-demographic-analysis-estimates/2020-demographic-analysis-estimates-japanese.html>

参照 URL 2 Chinese Ethnic Groups: Overview Statistics

[https://guides.lib.unc.edu/china\\_ethnic/statistics](https://guides.lib.unc.edu/china_ethnic/statistics)

### 参照文献

国立民族学博物館編『世界民族百科事典』丸善出版、2014

クロード・レヴィ＝ストロース（渡邊公三訳）『人種の歴史、人種と文化』みすず書房、2019

アマルティア・セン『アイデンティティと暴力—運命は幻想である』（大門毅編集、東郷えりか訳）勁草書房、2011

竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う—西洋のパラダイムを超えて』人文書院、2005

日本文化人類学会編『文化人類学事典』丸善出版、2009

長友淳編『グローバル化時代の文化・社会を学ぶ』世界思想社、2017